

「起業家福沢諭吉の生涯 学で富み富て学び」

玉置紀夫(著)

有斐閣 2002年4月25日刊

今から101年前の1901年2月3日、日本近代史において極めてユニークな足跡を残した福沢諭吉は亡くなっている。生前の福沢を知る小泉信三は伝記『福沢諭吉』（岩波新書）の中で「福沢は革新期における解放思想家の第一の一人として、その主張するところは因襲にたいする合理、差別にたいする平等、束縛にたいする自由、服従にたいする独立であり、人性をその自然のままに解き放つことは、その最も力を致すところであった」と要約している。その後、多くの人々が福沢を研究の対象としてきたが、それは西欧文明の紹介者、思想家、教育者としての福沢を描くという点では小泉の枠組みを超えるものではなかった。

本書の著者、玉置紀夫教授は慶応義塾大学で産業史とりわけ日本とイギリスにおける銀行史を研究してきた歴史家である。その玉置教授が新たに福沢諭吉の伝記を書く意義とは何であろうか。

それは起業家あるいは現在流行の言葉でいえば、ビジネスモデルの紹介者としての福沢諭吉をクローズアップするということである。この点について過去の福沢研究が触れていないというわけではないが、玉置教授は歴史家としてこの分野における資料を綿密に調査し、実際に福沢が立ち上げた事業について、その経緯を明らかにしている。その事業の内容には目を見張るものがある。列挙すれば、(1)慶応義塾は言わずと知れた福沢の本拠地である教育機関であるが、福沢は慶応義塾の地所、建物、運営費用の一切を自費で賄った。(2)洋書輸入の先駆けとなった丸善は今も事業を続けている。(3)為替取扱銀行としての横浜正金銀行は世界の三大為替銀行としての地位を確保し、東京三菱銀行として今も続いている。(4)新興財閥の三菱は福沢の画策で高島炭鉱の払い下げを受けさらなる発展を遂げ、(5)旧財閥三井の中核三井銀行も福沢の影響下で不良債権の処理をし、近代化を遂げた。(6)自由民権運動の中で言論活動の場として福沢が設立した時事新報は現在産経新聞として脈々と続いている。(7)言論活動の重要性を認識した福沢はイギリス流のディベート・クラブとして交詢社を興した。これらの事業のほかにも、福沢は外交や政治に関して積極的に発言し、特許制度や学士院など近代的諸制度の整備に助力し続けたのである。

これらの事業は全て前例のないベンチャーであり、福沢は有力資産家や慶応関係の有志をつのって、自らもベンチャー・キャピタリストとして投資を行い、それらの企業の大株主に名前を連ねていたのである。福沢の商才はずば抜けており、時事新報からの所得だけで当時の総理大臣の2倍近くの所得を得ていたことが明らかにされている。

しかし、これらの事業を振り返ると、単にそれらの事業が儲かるからという理由で起業したわけではなく、日本の近代化にとってどうしても必要な事業と

して立ち上げ、それゆえに現在でも多くの企業が立派に存続し機能しているという点が重要である。

福沢の行動を総合的に捉えれば、時代の転換点を事前に読み、それに備えて適切な準備をし、その変革期には新しい社会のコーディネーターの第一人者となり、どのようなビジネスが将来必要になるのかを適切に理解し、そのビジネスを実際に立ち上げていったということになるだろうか。教育者であり思想家であるということは福沢の実践のほんの一部にすぎないということが本書を読むことで良くわかる。

起業家としての福沢諭吉を見直すべきであり、さらに言えば、福沢諭吉自身が新しい時代のビジネスモデルなのだという著者の指摘は極めて重要な示唆を含んでいる。時宜を得た本書の出版を喜ぶたい。